

今年のゴールデンウィークは、10連休となった方もあり、加えて3年ぶりに規制解除されたことでのあちこちの渋滞や混雑の報道に、驚きと不安を感じつつも元通りの日々を願い、一時でも早いコロナの収束をより一層強くお祈りしました。

さて、新入児の慣らし保育も無事に終わり、いよいよ本格的な今年度の園生活がスタートしました。ひとりひとりの子ども達にとって、ここで過ごす毎日が楽しく心地よい場であるように、そしてどんな時も在るがままの自分をありのままに表現できるように、私達保育者が子どもの心に静かに寄り添える安らかな存在であり続けることを常に願い祈りながら、1日1日を大切に努めたいと思っています。

『就学前の子ども達は、心も身体も急速に成長する時期です。

この時期を親はじっくりと見守れず、仕事の都合で保育園に子どもを預ける親の寂しさがあります。二度とこの時期は戻ってきません。

親に代わって、その恩恵にあずかれるのが保育士の特権です。

ですから、一人一人の子ども達が、どんな変化をしているか、どんな言葉を語ったかなどを、親に伝えてほしいと期待します。私も4人の子どもを育てましたが、写真はたくさん撮ったものの、子ども達の語った意外な言葉やドキとする言葉や面白い表現などをメモに残すことをしませんでした。

それが今も悔やまれます。大きくなれば、常識的な態度や言葉を身につけてしまします。輝くような言葉や振る舞いは成長の中で失われます。・・・』

これは、先日の職員研修でも用いた「キリスト教保育」掲載のコラムから抜粋した文章ですが、保育者の大事な使命の1つとして改めて思わされ考えさせられました。何より、子ども達のその時その時に感じた想いを表す素敵な言葉や豊かな表現は写真には決して残らないということについて、まさにその通りだと気付かされました。日々の小さな命の息吹を私達大人が全身で感じながら、一瞬一瞬の幼い心の動きを私達自身の生きたまなざしで、生きた感性で、いつでも丁寧に受け止め、心に刻みお家の方に生きた言葉で伝えることを通して、ひとりひとりの成長の姿やその証を共に喜び合い分かち合うことこそが子ども達への責任なのだと思われています。そのためにも今年度は、保護者の皆様とのコミュニケーションの機会を出来る限り多く設けていこうと皆で話し合い、考えています。コロナ禍に在る中での困難よりこの乳幼児期に共に在ることの重要性を大切に、様々な方法で工夫を凝らしながら可能な形に変えてチャレンジしていきたいと思っていますので、ぜひとも皆様方に御参加頂ければ幸いです。（詳細については改めてお伝えします）

これまでの卒園生達が育み続けてきた“つのぶえらしさ”という宝物のバトンを、今年はまだ心新たにしっかり繋ぎ直して、新たな絆にしていけるよう願っています。この1年のつのぶえの歩みが神様の愛と光の中で豊かに導かれ前進できますようそして世界中の人々が神様と共に安らかにありますようお祈りします。(石田 記)

『主は 私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。(詩篇 138:8)』